



赤松満枝梅田旗

在東京
外國書

手 13
4418



上之卷

武田交來綴
陽州周延画
大倉孫兵衛板



深川區西元町八番地
編輯人 武田勝次郎
日本橋通二丁目十九番地
出板人 大倉孫兵衛

明チ 13
號 4418
巻

赤松

満祐梅

白旗

上之巻

武田交來綴

大倉孫兵衛

陽州周延画

壽梓



赤松満祐梅白旗全部三巻の序

紫の朱と奪ふ偽紫源氏の室町御所義教公が乱
酒小沈る。屢々諫めて満祐が爰に遺恨を含みける。
其顛末の太平記。彼活歴史て演劇小脚色ハ狂言
作者の華頭其の筋書と基として。書と舞臺の
勸善懲惡少一似たるの偽むとされ看客方の御意
いふば所謂僥倖たるべし

明治十二稔二月

松阿弥交來記



渥美五郎

三ヶ國墨附

愛妾小辨の局

足利將軍義教公

赤松教康



赤松満祐



よきため

室町五郎の
 赤松の四郎
 浪井は
 てお終由ふ
 葉の松小
 葉とらひ
 に若もあま
 ある武門の盛り
 時とるは足利六代の
 將軍後殺公けふ
 別館小菊の市宴
 万由もくあ入りと道徳の回



一回
 一又五郎
 色の感先と
 肩小なる横のびつらひて若
 色を妻とる小菊の
 局小を赤松とあせて
 送り玉ま色よの返奉と
 赤松あかつてまふも輔さるハ
 勝た死候はんの中りぬに返報
 若もあまわろと工む屋志の
 赤松あ入のちおと休若必
 病ふひるらんがチトつぎ

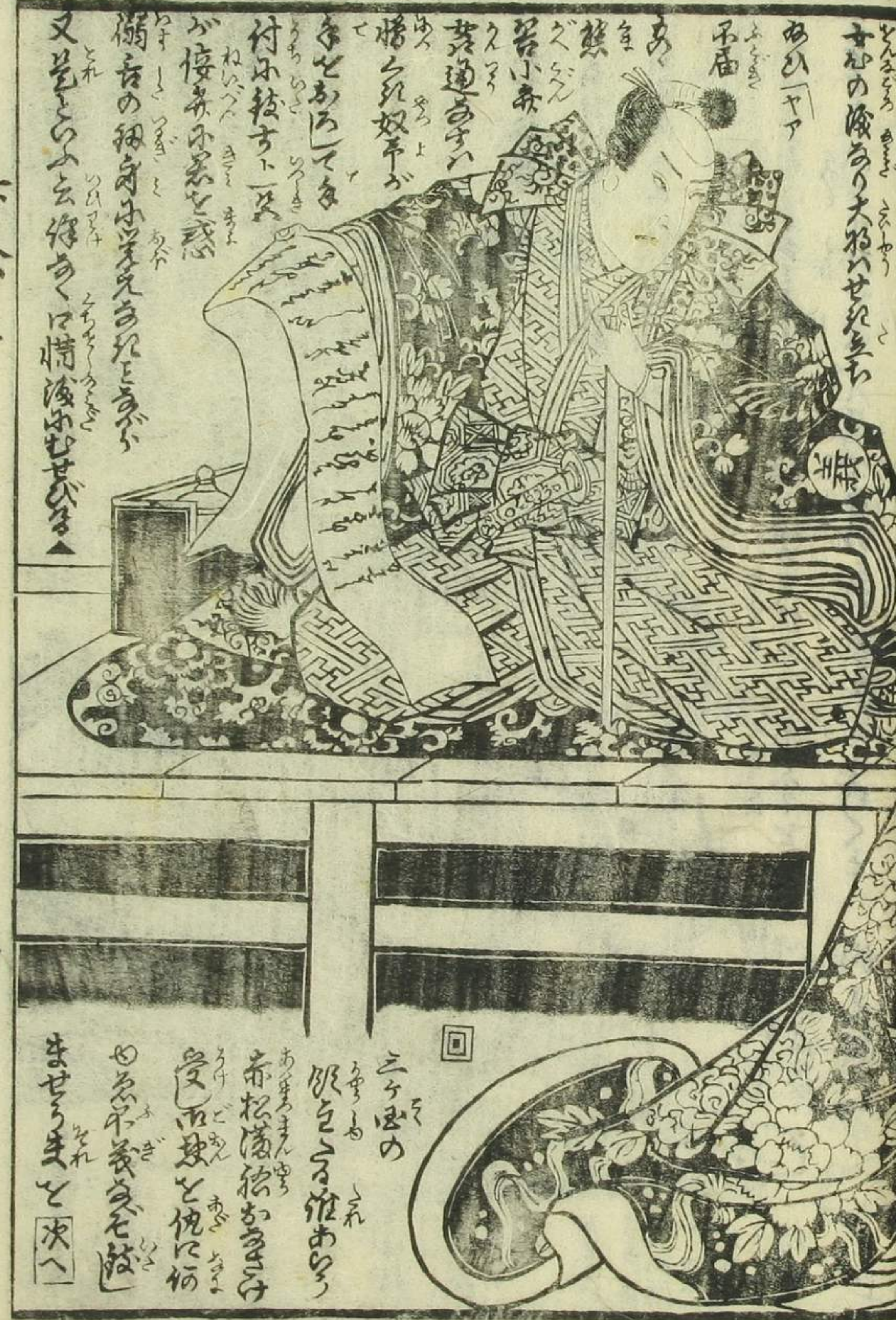
赤松

三



小舟の舟は覚悟
 を控め利玄
 の懐叙枝
 ありふく咽
 懐へ突まはさ
 息をとりとら
 小舟の舟は覚悟
 を控め利玄
 の懐叙枝
 ありふく咽
 懐へ突まはさ
 息をとりとら

小舟の舟は覚悟
 を控め利玄
 の懐叙枝
 ありふく咽
 懐へ突まはさ
 息をとりとら



赤公上の
 又是とのふと傳はくは情濃ゆむ其心

赤公上の
 又是とのふと傳はくは情濃ゆむ其心

つぎ 浄者の名の根小まゝのあふい

あふいとせいのあつて
一且のあつて

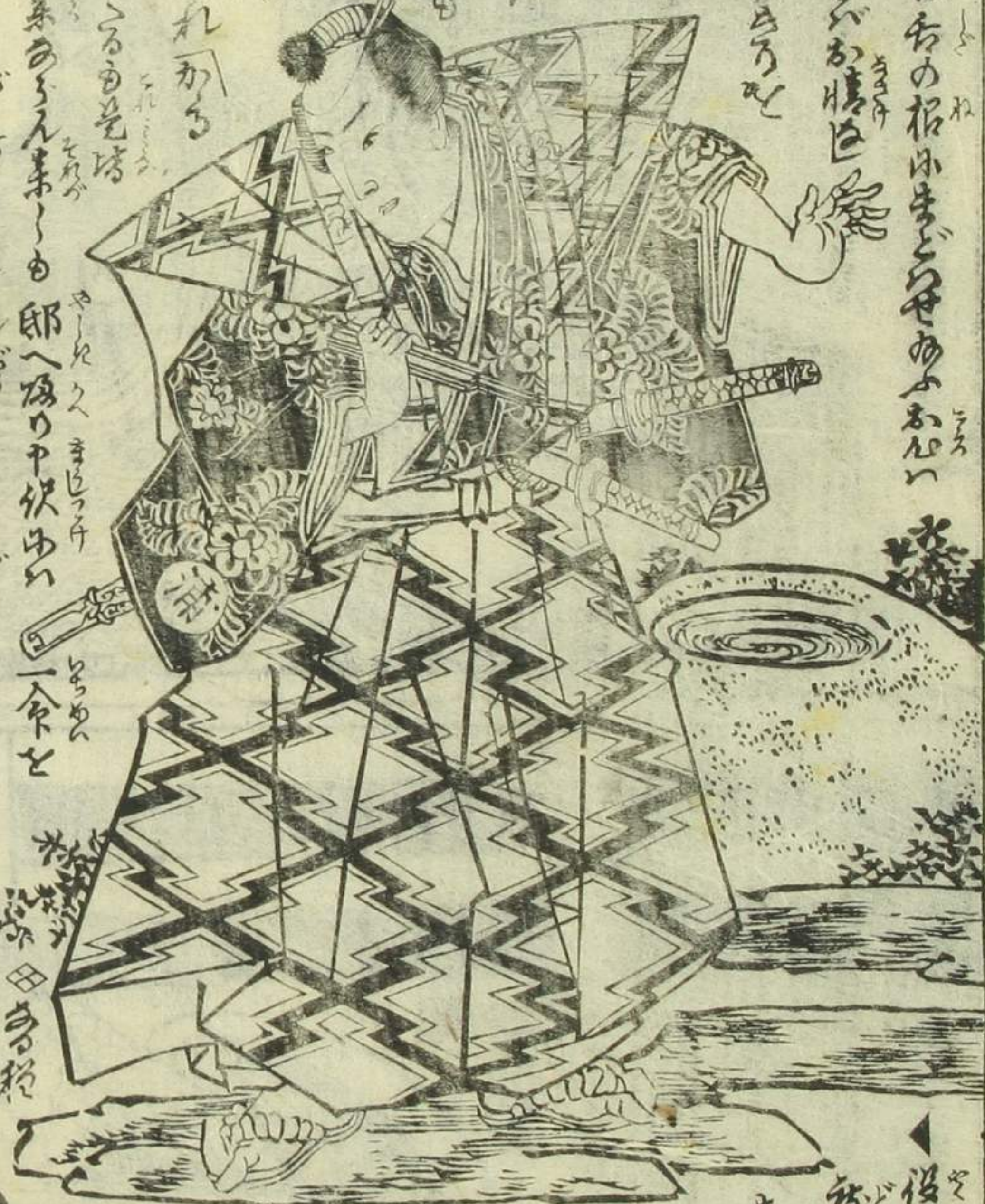
勝せけり
は自殺の推

せと死し
をを縁ゆ

けあけさ
若も減ふられ

汚名をうけ
赤世のあつて

赤世のあつて
一命と
あつて



役目のあつて
あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

忠臣が抱へり
義教公のあつて

赤世のあつて
赤世のあつて

二幕目
あつて

あつて

あつて

あつて

あつて



あつて

あつて

あつて

あつて



※今更山より上
 別の出さる松枝
 の水と散色を拵
 念と入世もけりな
 き玉急の事故いぞ
 なるまじ何卒五
 尾めが死におもひ
 されと神との仁心
 滋務も感入りつら
 彼が不幸の陰に輝
 か河がめであはし
 まつと密軍の後
 由あれ山山も五



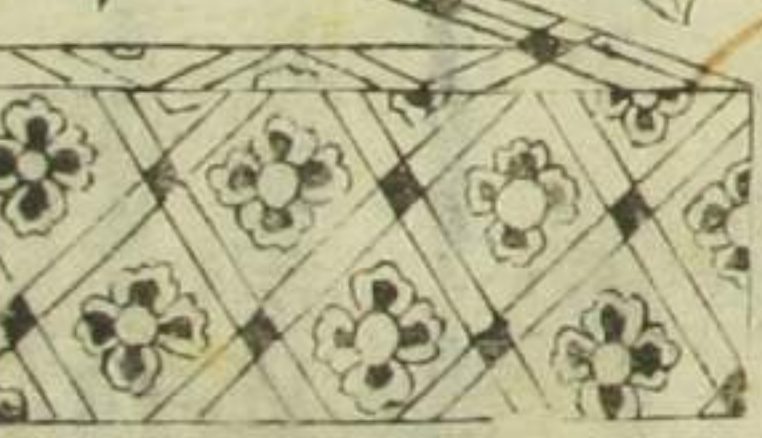
赤松得海松長柄小刀
 逆刃と只は付小刀
 今更山より上
 別の出さる松枝
 の水と散色を拵
 念と入世もけりな
 き玉急の事故いぞ
 なるまじ何卒五
 尾めが死におもひ
 されと神との仁心
 滋務も感入りつら
 彼が不幸の陰に輝
 か河がめであはし
 まつと密軍の後
 由あれ山山も五

大工
 改
 なる
 シテ
 別
 の
 水
 と
 散
 色
 を
 拵
 念
 と
 入
 世
 も
 け
 り
 な
 き
 玉
 急
 の
 事
 故
 い
 ぞ
 なる
 ま
 じ
 何
 卒
 五
 尾
 め
 が
 死
 に
 お
 も
 ひ
 され
 と
 神
 の
 仁
 心
 滋
 務
 も
 感
 入
 り
 つ
 ら
 彼
 が
 不
 幸
 の
 陰
 に
 輝
 か
 河
 が
 め
 で
 あ
 は
 し
 ま
 つ
 と
 密
 軍
 の
 後
 由
 あ
 れ
 山
 山
 も
 五

何松の志のあらと
 世に不左の羽



松の葉
 家の赤
 出ると
 松の葉
 家の赤



松が
 赤
 出ると
 松の葉
 家の赤

道者の士ありて
 くハツ中上なるは
 今も殿を教廉さる
 何れも忠の由指指
 是へお出ゆりませう
 知れせの烟は満裕
 浦上心ともうく
 松の葉
 家の赤



松の葉
 家の赤

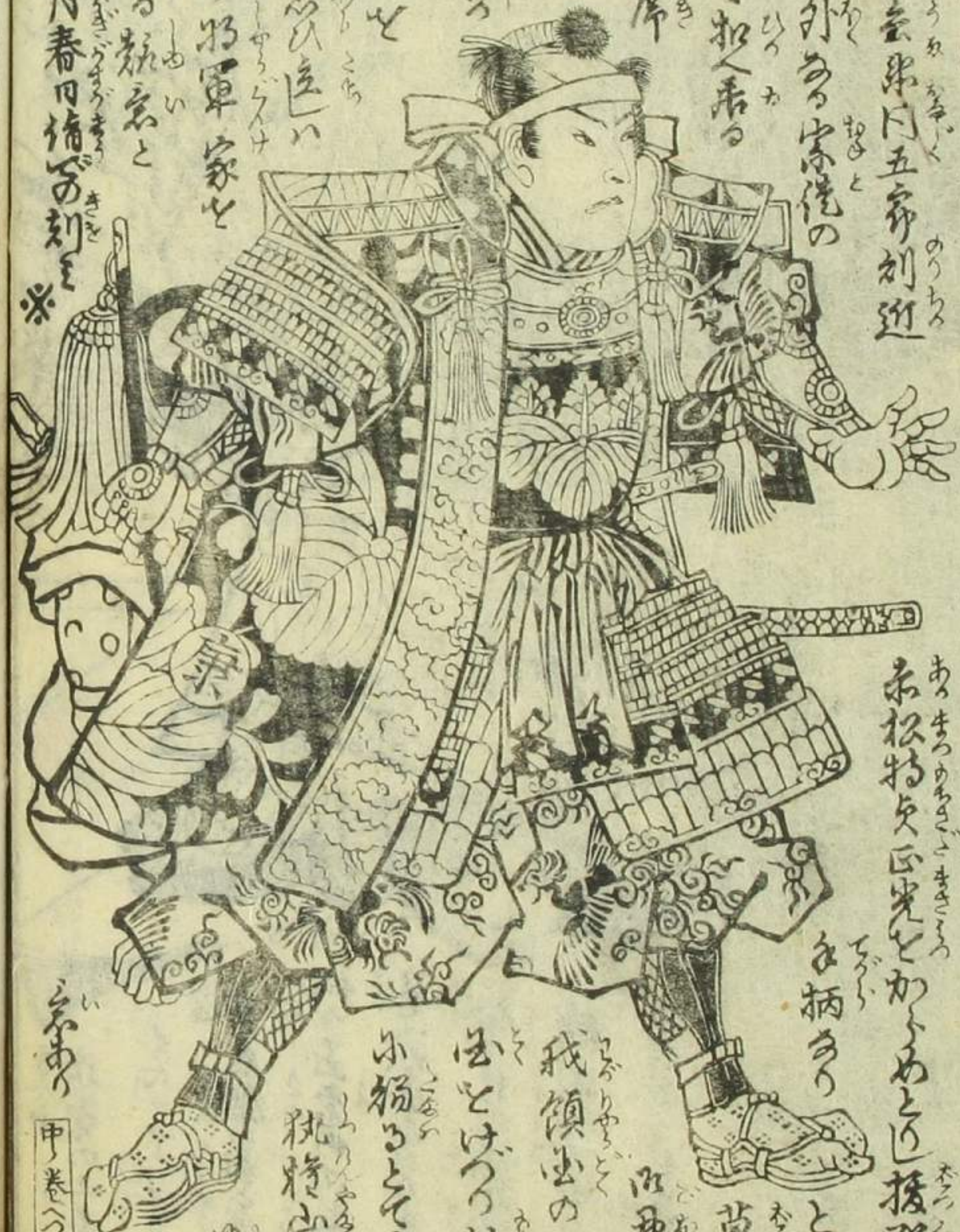
松の葉
 家の赤
 盤も忽ち松葉々

松の葉
 家の赤
 松の葉
 家の赤
 松の葉
 家の赤
 松の葉
 家の赤

ついで 廣間中麻呂を討つる掛物八幡の御説也
 嘉吉と父かんを討つて知る不忠赤松五郎
 別府がけ山を討つる宗徳の
 勇士山家へ進軍拒する
 後松の復けの序
 ろの休息を
 且ておんろり
 小松原渡り也
 是れ先は後松の以て
 我々と知りつる將軍家也
 眼をたてまつる精意と
 ろのさめぬ智春四捕り刻也

※ 前巻の二の巻に於る小松原の捕り光
 將軍家を討つる小松原の捕り光
 赤松の討つる光とわめとに後松の
 我領出の之
 必とわつる捕り
 小松原とてす
 我領出の之
 必とわつる捕り
 小松原とてす

甲巻へく



菊種延命代衣 初編 五編 唐兒島英銘傳二冊

假名手本忠臣藏 三冊 切

松榮千代田神徳 全

日月星享和政談 全

諸國大合戦仇討本
 同 彩色 以全
 昔は色し小本多
 同 色 入 志れく

分 和漢洋書籍 問屋

出版御届明治十二年 月 日
 深川區西元町八番地
 編輯人 武田勝治郎
 東京日本橋區通壺丁目十九番地
 出版人 大倉孫兵衛

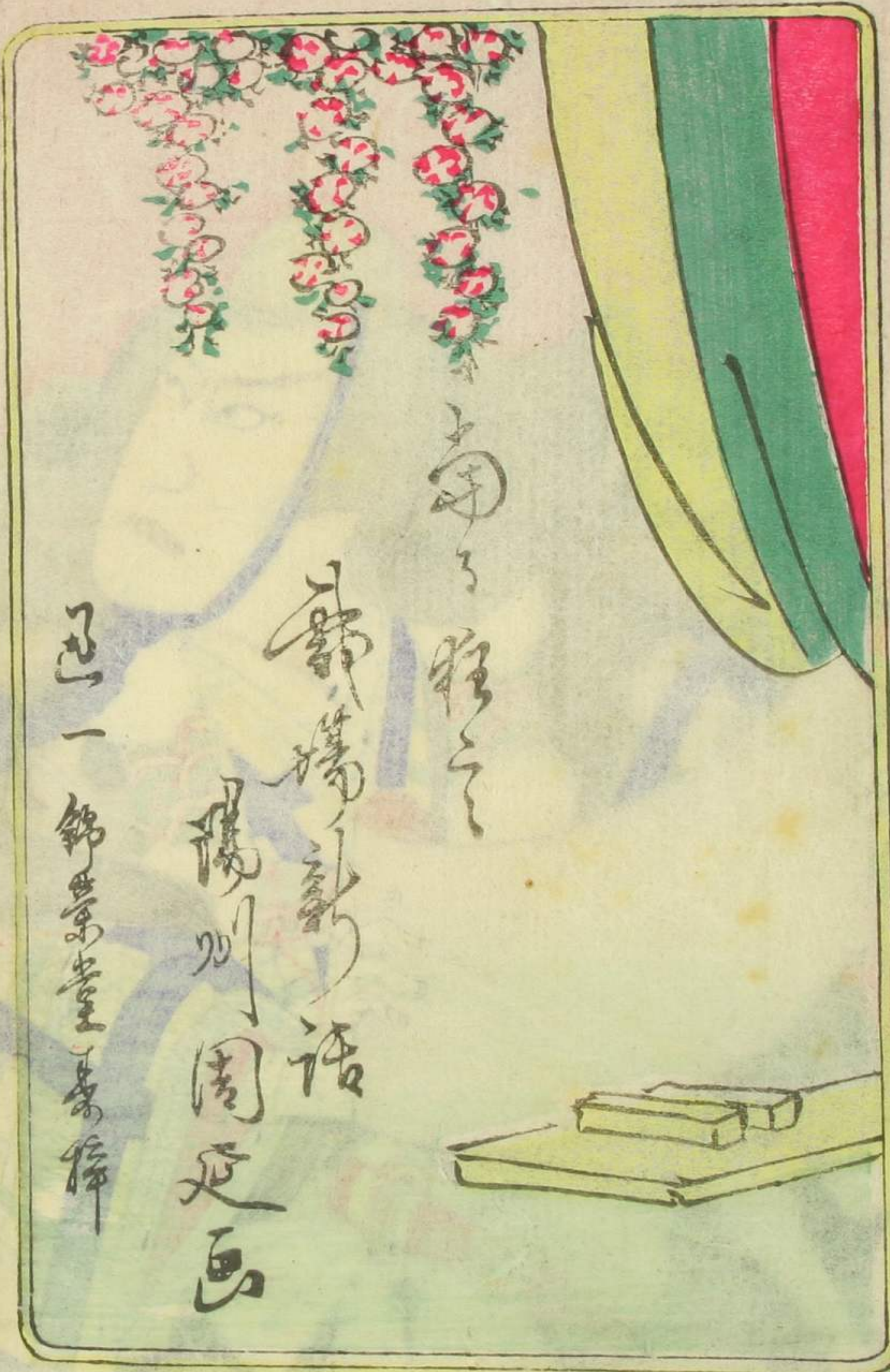
中之卷



上の巻のつぎに二ツのつが姫小あが熊治成と
 不長せしと伝由るきと行おし不妻あひ極ま
 始の自害せしつらもの思好の義女に二ツまは
 ニツまに死なれ成と初と小妻あふかるるまの
 中振舞いつづらあふんどおのりまを
 まゆあを若人も
 ひく心跡は
 友旅舞を
 初た小補理員
 せせせしゆはとる羽軍家と
 彼へ招ぎとつと何ひ裁せんと密う
 みける我が拍中さ方
 ともい知何あや

家とお恨とあて水條及と
 とうやその水方あ「あ」とその性昔
 とう水色若小らと引き好く一肘い
 水猪判あるもとてい必らび

公 祐
 小 羽軍
 小 公



部場新話
 陽則周延画
 一 錦葉堂主 景 梓

味方の故小迫死に陥りし由もさるる事と成るる事
 我君あてのりし如何なる天魔の入りりやお情け
 る死お心根やと忠臣面々おあふまて涙を流
 く涙めがおひ入る港社へ怒る眼は



ねめつすぬひマ

小ざしき株云

ご一掃あひ

まろろあひ

つらるあひ

ひ止まぬ

お益の旨の振動する

とねこい勇むぞ

○ハヤお軍家の内威と

血祭 及の 練む 是れ ぼ かし 死



ト不身氣あつえぬお強さへ見惜のそい

かくお休め申せしうあお用ひあられは是非小

及びぬまるる通りト肌押ぬきて是れ

を接放し候へ実ま引まらす海兵

候予もお後席もハツと

おと父の形

練め兼こ

つ

勇士

の志

をも通す候石心強さ

あせせ乃由あり長久保公

好の居とて道

臣もろろ右

連入りあふ

山接あ小社を

後け重然とすく

舞臣特相のまれば

洞の音のああ男の

おろくに忠院の旗を

お越して暴を吹くる

鞍をゆるぎあふるの

山前なるをく既小危なき

大發動上と下人と

三

赤松義隆一人何れど内海の方義隆の妻



赤松の妻

よこはらに拙者めをわらひ
下さるぬん切かじけりぬれどそふな

入ッ之れバ我を是
より切て出花しき
一戦は若と後代又
止めんと立せ中はと
妻新以司く付
と糧の袖たぐも
今日があらうれと女
子んの様事後
傍小内侍由ひれ伏
て前後心付く
折々々々之傷小座
せぬ源兵五郎
西海進くとりの勢



山家い皆来一がゆりて累か内不意の
ぬれ船とのひ又ニツの一家る
我赤松の故味方是非とも
満徳が首とあひ亡るへ
さし上んと遊々
後ろより樽内小さる若
ありと心とる海兵
五郎あつた
あて誰す
持貞と後り
あふ互ひ必死の
一請うち目さぬくこそるえに多
○樽内の出院あつ満徳の室

今世の
海兵退々
せぬ味方の
勢は二の
丸まで攻

五
丸の権謀
まぐ
押
せ
と
小
孫
一
の
接
近
ハ
ト
戦
ハ
沈

つぎさぬとてく如く血

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

おき後十世起る政公小

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の



赤公中

軍家の赤首と後領細川故えん

きう後う切て果せり



ゆい海軍の



ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

ゆい海軍の

蒸氣積問屋

乗客帳

出帆日控

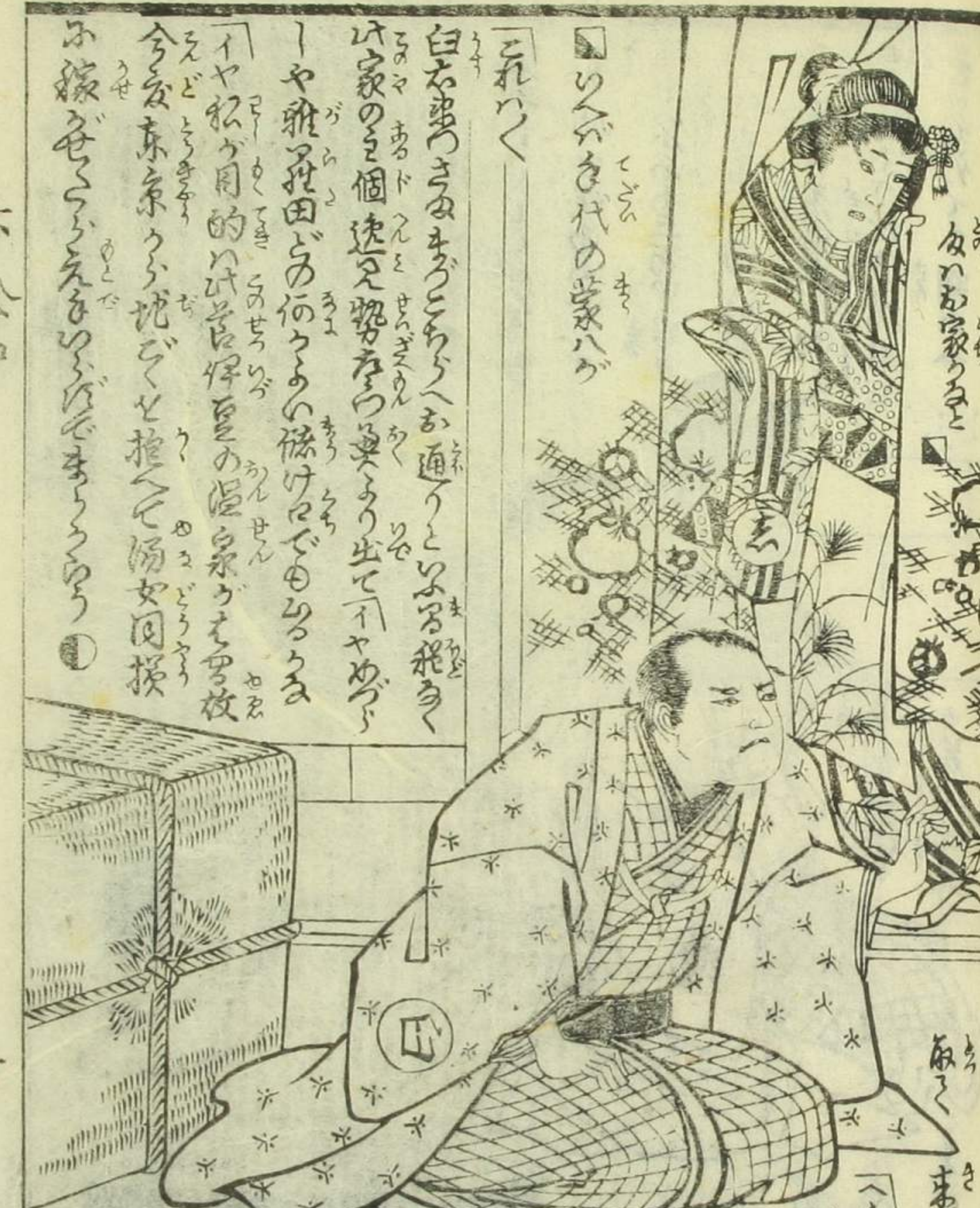
伏見

横濱 船出 父世代 入船出帆 蒸氣へ 横濱 船出 父世代 入船出帆 蒸氣へ 横濱 船出 父世代 入船出帆 蒸氣へ



お捕手外は終小 家由退指しと伯 父の逸名芳への 合客 伯父 今久 里末 引と 林の 女 志しを對し

小樓と風めく 柳の影の



これいへ 白の雲のさぬまがとちうへお通りとよる程多 け家のと個速え勢をの奥より出てイヤめど ーや雅と雅田との何うあの様けいでもらうま イヤ松の目的は昔好むの温ら水うそ野放 今と東系うら地ごとと控へて湯女同様 不嫁をさうえいゆいばまうらう

文 廿 出 札 金 と 未 子 糸 取 へ 受 子 取

教と改ふ 五十三回 五里の不足を

五里の指先と教のうけは他人より非なる

み林の女はさう向て居るが白お菊も同じ

脱獄 まいとうと遠見女も教が為め

親の長の修の長女といはれ病室

とあるはがむのふあり存して

かゝる言がうべらち

たう込む伏せの中

何とゆめ由三百里なり

白お菊のどののり

通の長女が死

ぬと極むは流方防利と

まをりては割小



種紙同

金田宗若

ともりれと

お人お坊の

あうか換と

しを終おれ

お病死を

の備母さん

し由田に女

あのと三人の

のふとありひ

あは流由目れ

うさ表へ来たる

近のころ

お兄様

申しせめて

お省高

てのうて

あげやう小

ア、まゝさうね

と身と嘆てい



かゝる換ふるまふとていへ林の女

流と一絶ととも 伯父の教

由雅流

田由それら

ふき妻の下写へ

入りおやり引遠へて是も又

目トけ家のかゝるとと娘のあう

か捕りては「お林の女」とい

とい目と流身目士とていへお町で

決へ

示公

八



○ 意然も利持もあふ
 怖や人の子の
 大林木物と健
 お花ひ
 遊そ
 由く

○ 浸ちこれの仙元下裏
 や家小祖母と孫一人
 赤府林が乳母
 あま孫千の外
 かすう小生活はあはれい
 祖母の長の娘いふとろとさるる落布袋
 林のぬい十山の金のをむもさるくとさるる

○ 二面の相おひねるのて面目予小乳母が
 二面をて
 云ひも果
 ぬすの衣
 是程

○ の大はひとひま不審をれりて

菊種延命代衣 初編 五編迄 十五冊より切

鹿兒島英銘傳二冊

假名手本忠臣藏 三冊より切

諸國大合戦仇討本

松栄千代田神徳 全

同 彩色 以里

日月星享和政談 全

昔は陸し小本りあ
 同 色入 志れく

出版御辰明治十二年 月 日

深川區西元町八番地

和漢洋書籍 問屋

編輯人 武田勝治郎

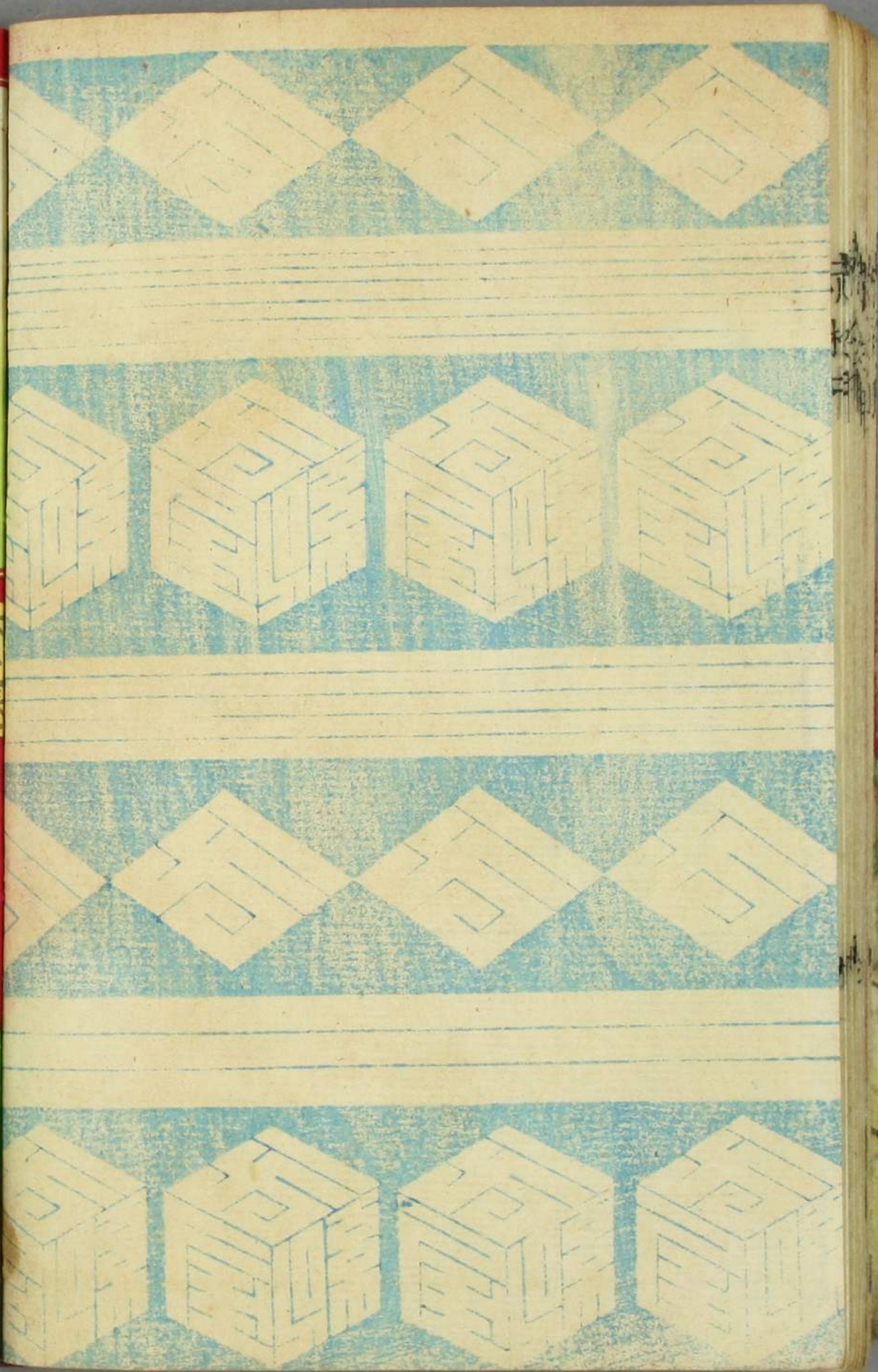
東錦繪地本

東京日本橋區通寺丁目十九番地
 出版人 大倉孫兵衛



ありまつまのむらうめい
赤松満祐梅田良雄

下之巻



ついでにわらわの病を治すに養生する事

ついでに死を治すに死人の世帯

おまのゆり実おまのゆり

くお下いと後む文を

速んせとせむ妻

おらん娘を

雅羅田も共不報

是合せ「シテくわ

かの雨を多く後で

下さるませ

トよみおら

と雨を府林

伯父の病を治すに養生する事

阪先を嘆息のついでに五房を

おまのゆり実おまのゆり

くお下いと後む文を

速んせとせむ妻

おらん娘を

雅羅田も共不報

是合せ「シテくわ

かの雨を多く後で

下さるませ

トよみおら

と雨を府林

伯父の病を治すに養生する事

阪先を嘆息のついでに五房を

赤木下



金田の

金田宗右

おまのゆり実おまのゆり

くお下いと後む文を

速んせとせむ妻

おらん娘を

雅羅田も共不報

是合せ「シテくわ

かの雨を多く後で

下さるませ

トよみおら

と雨を府林

伯父の病を治すに養生する事

阪先を嘆息のついでに五房を

おまのゆり実おまのゆり

くお下いと後む文を

速んせとせむ妻

おらん娘を

雅羅田も共不報

是合せ「シテくわ

かの雨を多く後で

下さるませ

トよみおら

と雨を府林

伯父の病を治すに養生する事

阪先を嘆息のついでに五房を

赤木下

赤松下

ついでに

運び込む様
おまゝの御持物

おまゝと
おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ



おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

五



おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

おまゝ

赤松下



〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし
 〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし
 〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし

林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし

〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし
 〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし



〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし
 〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし

〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし

〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし
 〇 林とみいを御五郎
 右馬とけり二万
 うは花小返せし

